わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ ⑱

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

黒猫が欲しい

空前の猫ブームだという。

もともと猫が好きな私にとっては、ブームといわれてもピンと来ないが、様々な媒体で猫たちが愛らしい姿を見せてくれる機会が増えたことは確か。素直に喜んでいる。

しかし、当然ながら猫が好きでない人も多い。フレンドリーでないとか、自分勝手だから、というのがその理由として挙げられるが、猫好きにとってはそこがまた魅力でもあるのだからどうしようもない。

猫は不気味だと言う人もある。暗闇の中で光る眼、こちらを見透かすような、ずまい。確かに、私のかすかな記憶の中にも、吊り上がった大きな眼をした猫が怪談として描かれた姿が残っている。入江たか子主演の「化け猫」映画である。美しい姫君が恨みのこもった猫に姿を変える様は、今観てもおどろおどろしく、見応えがある。変身する当時の映像がYouTube（インターネット無料動画サイト）で公開されているので、是非ご覧いただきたい。

猫、とりわけ黒猫は、中世のヨーロッパでは悪魔と同義語として扱われてきた歴史がある。14世紀から17世紀にかけて、天災や病気など悪い出来事は皆魔女のせいだとされて、大規模な魔女狩りが行われた。犠牲者の数は数万とも数十万ともいわれ、その暴挙はヨーロッパの歴史に黒い影を落とした。

魔女狩りとともに起こった黒猫の虐殺はカトリック教会が主導した、という説は今や覆されつつあるようだが、全く無関係とは言いがたい。12

33年、ローマ教皇のグレゴリウス9世は、著書「ラマの声」の中で、黒猫は悪の下僕である、と記した。また、同じくローマ教皇のインノケンティウス7世は、成人のお祝いに猫を殺すことを認めている。以後、イタリアやベルギーなどでは、猫を殺す行事が定期的に繰り広げられてきた。

魔女の図柄には、寄り添うようして黒猫が描かれていることがよくある。そういえば宮崎駿監督の「魔女の宅急便」にもジジという名の黒猫が登場していた。

ヨーロッパで度々猛威を振るったペストは、全身が真っ黒になるため「黒死病」の名で知られる。特に14世紀には、ヨーロッパの人口が3分の2近くまで減ったほどの大流行を引き起こした。これもまた、魔女のせいだとされたようだが、全くの濡れ衣だ。むしろ、猫を嫌って虐殺したがゆえにネズミの繁殖を促したことが要因ともいえる。ペストはもともとネズミの病気で、ノミを媒介として人間に感染を引き起こすからだ。

日本に最初にペストが侵入したのは明治に入ってからだ。ペストによる死亡者もあったが、ヨーロッパほどの流行には至らなかった。日本では黒猫は魔除けとされ、むしろ縁起の良い動物として受け入れられてきたから、というのは少々言い過ぎかもしれないが、夏目漱石の「吾輩は猫である」が長く親しまれていることからも、猫と人間の良き関係性が伺える。

タイトルの「黒猫が欲しい」は、日本でも大ヒットした「黒猫のタンゴ」の原題である。黒猫を迫害してきた歴史を反省して、イタリアで作られた歌だ。歌詞には、わざわざ「白猫ではなく、黒猫が欲しい」と謳われている。

国によって時代によってこれほど評価が分かれるとは、黒猫にとって甚だ迷惑であることは間違いないだろう。

イラスト・伊藤栄章